様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　20　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006　～　2008
課題番号：18791662
研究課題名（和文）　生体肝移植ドナーのケアリング・システムの構築に向けての基礎的研究

研究課題名（英文）　Fundamental study for construction of Caring system of living liver transplantation donor

研究代表者　永田　明（NAGATA AKIRA）
愛媛大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：30401764

研究成果の概要：生体肝移植ドナーの QOL の向上を目指しケアリング・システムの構築のために、現状の医療の現象を把握することを目指し、生体肝移植医療に従事する看護師に対して、半構成的面接を行い、移植医療に従事知る看護師の体験の意味を明らかにした、生体肝移植医療に従事する看護師の知識不足が反映される、「分かっていても踏み込めない」という感情やジレンマを抱えながら看護に従事する姿が明らかになった。このことから、生体肝移植ドナーの看護に従事する看護師の資質の向上が必要であるという示唆が得られた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	150,000	2,850,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：生体肝移植、ドナー、ケアリング・システム、看護学

１．研究開始当初の背景

日本では他の国と比較して，生体肝移植が特異的に進歩してきた．生体肝移植は，脳死肝移植に比べて待機期間が短く，患者の全身状態が比較的良いときを選んで計画的に実施できるという利点がある．しかし欠点としては，本人の治療をするという目的ではないのにもかかわらず，健康な人にメスを入れて傷害を負わせ，臓器を摘出しなければならないということがあげられる．これらの利点・欠点に対する十分な議論がなされていない．以前おこなった研究において，生体肝移植ド

ナー（以下, ドナー）から, 自らがドナーとなることを決めるに至るまでに経験した苦悩や, レシピエントに対する複雑な思いを聞いた. その中で身体的, 心理社会的, さらにはスピリチュアルな側面においても問題を抱えていることが明らかになった。

２．研究の目的

ドナーに対して, 対象を全体論的に捉え, 生き方, 生活を変化させながら健康を獲得することを支援するケアリングの概念を重視したケアが必要であると考えられる. 現時点ではドナーに対してのケアリング・システムが十分に構築されているとは言い難く, その構築が急務であるといえる. そこで本研究では, ドナーの体験を詳細に記述し, その中から全体論的な視点に基づくケアニーズを明らかにすることで, ドナーのケアリング・システム構築に向けた基礎資料とするために生体腎移植・生体肝移植の実施施設の外科病棟に従事する看護師、生体肝移植患者の移植前の看護に従事する看護師を対象に調査を行った。

【生体腎移植・生体肝移植の実施施設の外科病棟に従事する看護師を対象に行った調査】

３．研究の方法

参加者：研究の趣旨に同意が得られた生体移植医療に従事する外科病棟看護師 6 名。
方法：各 1~2 回の半構成的面接の内容を主なデータとした。面接時間は 1 回 60-90 分であった。
分析：質的記述的に分析を行い、生体移植医療に関わる看護師の体験を物語る【体験】を示す文節を取り出しテーマを付けた。各々のテーマの関係を検討し、主なテーマを導き出した。
倫理的配慮：研究の趣旨を文書・口頭で説明、同意を得た。自発的な意志に基づく参加であり、随時辞退可能なことを保障した。さらに個人が特定できないように配慮した。

４．研究成果

参加者の看護師経験は 5~20 年、生体移植医療の経験は 3~15 年。領域は肝移植領域が 3 名、腎移植領域が 3 名であった。分析の結果から、11 のテーマが存在し、以下の 3 つの主なテーマに示される生体肝移植医療に関わる看護師の体験が明らかになった。

(1)．分かっていても踏み込めない

術前に移植患者やドナーの動揺に気づいても、「移植をやめる」や「臓器提供をやめる」と言われたくないとう思いから踏み込めないという体験をしている。肝移植領域の看護師は、ドナーが拒否することが、患者の死につながるために踏み込むことをためらう体験をしていた。腎移植領域の経験のある看護師は、ドナーに対してもう一度よく考えるよう促していた。

(2)．レシピエントを中心とした医療

術前・術後ともケアの必要度が高いレシピエントに対して集中し、ケアの負担に疲弊していた。また、「ドナーは健康体である」という思いこみから、ドナーへの関わりは二の次となり看護が行えていないという思いを双方の領域の看護師が同じような思いを抱いていた。

(3).看護を行いながら感じるジレンマ

双方の領域の看護師が、移植医療は不確かな部分が多くあり、患者や家族に対して確信を持って対応できていないという思いがあった。また、肝移植領域の看護師は不幸な転機をたどる患者にどのように対応するべきか苦慮し、患者にとって「移植」という医療

が適切であったのか疑問に思うこともあるということを経験していた。

【生体肝移植患者の移植前の看護に従事する看護師を対象に調査】

３．研究の方法

参加者：研究の趣旨に同意が得られた生体移植医療に従事する内科病棟看護師 11 名。
方法：各 1~2 回の半構成的面接の内容を主なデータとした。面接時間は 1 回 60-90 分であった。
分析：質的記述的に分析を行い、生体移植医療に関わる看護師の体験を物語る【体験】を示す文節を取り出しテーマを付けた。各々のテーマの関係を検討し、主なテーマを導き出した。
倫理的配慮：研究の趣旨を文書・口頭で説明、同意を得た。自発的な意志に基づく参加であり、随時辞退可能なことを保障した。さらに個人が特定できないように配慮した。

４．研究成果

内科病棟に従事する看護師の移植をまつ患者への看護についての考え方の語りから、「移植患者に対して踏み込んだ関わりができない」、そして「移植チームの一員ではない感覚」という 2 つのテーマが明らかになった。自分の経験不足や学習不足によって患者への関わりに躊躇したり、家族内の複雑な問題などを敢えて避けたり、たとえ問題が明らかになったとしても何もできないという思いから、移植患者に対して踏み込んだ関わりができないという思いを抱いていた。また、内科医、外科医との連携が薄く情報が少ないことや、移植へのプロセスが医師と患者の中でだけ決定され蚊帳の外にいる感覚をもったり、外科病棟へ転棟した後のフィードバックがなく達成感が得られなかったり、さらに内科病棟での明確な基準やアウトカムの設定がないために、自分たちは移植チームの一員ではない感覚を持っていた。

本来の研究目的としては、生体肝移植ドナー本人からの調査を行いケアニーズを明らかにする予定であった。しかし、研究協力を得る予定であった施設の事情の変更、研究者自身が所属施設を移動したこともあり、生体肝移植ドナーに対して直接調査を行うことが不可能であった。

そのため、生体肝移植ドナーの医療に従事する看護師の体験を調査することで、現在の看護学視点において、生体肝移植医療の問題点を明らかにすることを目指した研究を行った。

今回の研究の結果から、生体肝移植に従事する看護師は身体的な側面を中心にした視点に基づいた看護実践は行っていたが、生体移植レシピエントのみならず、生体移植ドナーの心理・社会的な問題に気がついていながらも、それらの患者に対して決定的な介入を行えていないと言うことが明らかになった。

これらの背景には、生体移植患者に対しての全人的なアプローチの方法や問題の同定の方法、そしてその問題に対しての介入の方法についての純分な知識を持ち合わせていないことが、これらの背景にあるものと考えられる。結果として、十分な知識を持ち合わせておらず、確信を持っての介入ができないために、看護師自身がジレンマを抱えてしまう自体が生まれていた。

生体肝移植ドナーのケアリング・システムの構築を行うためには、移植コーディネーターの養成だけにとどまらず、生体移植という専門領域に特化した看護師の育成も重要な課題であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4 件）

１．肝移植前の患者の看護に対する内科看護師の体験（発表決定）
第 5 回日本移植･再生医療看護学会学術集会、東京都、2009 年 10 月 3 日、平岡美波、永田明、竹葉美恵
２．献腎移植患者の体験
第 43 回日本移植学会総会、宮城県、2007 年 10 月 17 日、鶴巻摩樹、永田明、菊池陽子
３．献腎移植患者の待機中の体験
第 27 回日本看護科学学会学術集会、東京都、2007 年 12 月 7 日、永田明
４．生体移植医療に従事する看護師の体験
　兵庫県、第 26 回日本看護科学学会学術集会、2006 年 12 月 2 日、永田明

６．研究組織
(1)研究代表者
　永田　明（NAGATA AKIRA）
　愛媛大学・大学院医学系研究科・助教
　研究者番号：30401764